

菅原道真詩文における「残菊」をめぐる

——日中比較の視角から

高 兵 兵

一 はじめに

「残菊」は、中国唐代から詩に詠まれはじめた題材であるが、日本では、それを始めて詩に詠んだのは、菅原道真である。しかも、中国の古典詩では「残菊」はあまり取りあげられなかったのに対して、日本では菅原道真をはじめとする漢詩人たちによって積極的に取りあげられていたようである。

日中において「残菊」に対する関心の程度に差があることについては、数多くの先行論文に指摘されているが、^①ここでは改めて、道真の詩と唐詩とにおける「残菊」の作品数のデータを見てみよう。『全唐詩』には、「残菊」或いは菊を詠むのに「残」という表現を用いている詩は、全部で二十七首ある。これは『全唐詩』の総作品数から考えれば、けっして多いとは言えない。しかも、二十七首のう

ち、「残菊」の二字が詩題にあるのは二首のみである。これに対して、道真の作品集『菅家文章』『菅家後集』では、「残菊」或いは菊を詠むのに「残」で表現する詩（詩序も含む）は十七首あり、そのうち、詩題にあるのは八首で、ほぼ半数にのぼっている。

以上のデータから見れば、唐詩では、「残菊」は詩の主題としてあまり取りあげられていないのに対して、道真の詩では、それが好んで詠まれていることが分かる。このように、道真だけを取りあげても、日本と中国とでは「残菊」に対する関心の程度が異なるのは確かである。

ところが、「残菊」という言葉のニュアンスについては、諸先行論考では、意見が分かれている。小島憲之氏をはじめとするほとんどの論考では、「残」はもともと損なわれる・敗れるなどの意味を持ち、したがって、唐代に入ってから出現した「残菊」という語は、

「敗れて残る菊・傷んで残る菊」という意味を表すものとされ、さらに、この点が中国の詩では「残菊」があまり詠まれていない最大の理由であると考えられている。

小島氏はまた、道真の詩における「残菊」も、敗れるなどの意味で詠まれていると指摘しているが、これに対して、本間洋一氏は、道真の「黄華之過重陽、世俗謂之残菊」(『菅家文章』巻五・三五六)を取りあげ、「必ずしも衰残の意ではないことになるか」という観点を示している。以上の両氏のほかに、菅野禮行氏は、「残菊」は中国・日本の漢詩においてともに、ほとんど「重陽の後まで咲き残る」という意味で詠まれているのに対して、道真のみが「損なわれた」菊のことを詠むのに重点が置かれていると論じている。⁽⁴⁾

以上のように、中国と日本の漢詩に登場する「残菊」について、いくつかの見解が存在している。そして特に、日本で最初に「残菊」のことを詩に詠んだ菅原道真の作品に議論の焦点が当てられている。では一体、道真の「残菊」は、どのようなイメージで詠まれているのか。それに、道真の作品と唐詩における「残菊」とは、同じ意味を持つのか、異なるのか。さらに、「残菊」は中国では盛んに詠まれることはなく、逆に日本では道真を初めとして盛んに詠まれるようになった理由は何であるか。本稿では、先行論文を踏まえた上で、日中における「残菊」の時期の相違に着目し、道真の作品と中国の詩文における「残菊」を改めて比較することとする。そ

こから日中における「残菊」の根本的な相違を見出したい。

二 日中の「残菊」における時期の差について

まず、唐詩においても、道真の詩においても、

遊徐城河、忽見清淮、因寄趙八、李嘉祐

……

初過重陽惜残菊、初めて重陽を過ぎて、残菊を惜しみ
行看旧浦識群鷗、行くゆく旧浦を見て、群鷗を識る

……

(『全唐詩』巻二〇七)

惜残菊、各分一字、応制。並序

黄華之過重陽、世俗謂之残菊、今之可惜、非有意乎。

……

(『菅家文章』巻五・三五六)

とあるように、「残菊」は九月九日の重陽節を過ぎた時期の菊花を指すのは確かである。

しかし、「残菊」を詠む詩の題や詩句に見られる作詩の日時を見ると、両者は明らかに異なっている。唐詩では、次の、

九月十日雨中過張伯佳期柳鎮未至以詩招之 李益

……

唯有角巾霑雨至 唯だ角巾の雨に霑れて至る有り

手持残菊向西招 手に残菊を持ちて 西に向ひて招く

〔全唐詩〕卷二八三

九月十日郡樓独酌 羊士諤

……

嘉辰恨已失 嘉辰 恨として已に失し

残菊誰為惜 残菊 誰か惜しむを為さん

〔全唐詩〕卷三三二

九月十日即事 陳羽

……

節過重陽人病起 節は重陽を過ぎて 人は病より起つ

一枝殘菊不勝愁 一枝の殘菊 愁に勝へず

〔全唐詩〕卷三四八

などがあるように、重陽の翌日「九月十日」の日付がよく見られる。

また、日付がなくても、先に挙げた李嘉祐の作品に見られる「初過重陽」や、次の詩に、

万年厲員外宅殘菊 顧非熊

纔過重陽後 纔かに重陽を過ぎし後なるに

人心已為殘 人心 已に残と為す

……

〔全唐詩〕卷五〇九

とあるように、唐の「残菊」詩には、重陽を過ぎたばかりの時に詠まれるものが多い。

一方、道真の「残菊」を詠む作品では、詩序に「九日後朝」とある作品一首を除けば、次の、

殘菊詩。十韻。于時年十六

十月玄英至 十月 玄英至る

三分歲候休 三分 歲候休す

暮陰芳草歇 暮陰 芳草歇き

殘色菊花周 殘色 菊花周し

……

〔菅家文章〕卷一・三

冬夜有感、簡藤司馬

霜籬數步菊花殘 霜籬數步 菊花残れり

更有何人比目看 更に何人か目を比べて看ること有らん

……

〔菅家文章〕卷四・三〇七

暮秋、賦_二秋尽翫_一菊、応_レ令。並序

……于_レ時九月廿七日、孰不_レ謂_二之_一秋_一、孤叢兩三莖、孰不_レ謂_二之_一殘菊_一。……
〔菅家文章〕卷五・三八一

九月尽

今日二年九月尽 今日 二年九月尽き

此身五十八廻秋 此身 五十八廻の秋

思量何事中庭立 何事を思量してか 中庭に立つ

黄菊殘花白髮頭 黄菊の殘花 白髮の頭

〔菅家後集〕五一二

などのように、それは九月十日よりだいたい経過した後の九月下旬・九月末日・十月・冬などの時期が多い。

このように、道真の「殘菊」と唐詩のそれとは、同じく重陽を過ぎた後の菊花を指すにもかかわらず、唐詩では、重陽を過ぎたばかりの「九月十日」のものが多いのに対して、道真の作品では、重陽を過ぎてずいぶん時間が経った秋の暮れ或いは冬のものが多くいのである。

では、なぜ日中において「殘菊」の時期の相違が生じたのか。そこにこそ、道真の時代の日本と中国との、「殘菊」及び重陽節に対する認識の根本的差異が反映されていると思われる。以下に、この

点について詳しく検討しよう。

三 中国詩における「殘菊」と「十日菊」

唐代における「殘菊」のイメージを把握するには、まず、菊と九月九日重陽との関係を述べる必要がある。中国では古来、次の、

崔寔月令、九月九日、可_レ採_二菊花_一……

〔芸文類聚〕卷八十一「菊」

西京雜記曰、漢武帝宮人賈佩蘭、九月九日、佩_二茱萸_一、食_二餌_一、飲_二菊花酒_一、云_レ令_二人長寿_一。〔初學記〕卷四「九月九日」

などの記録があるように、菊は「九月九日」と関係が深いものである。さらに、次の、

魏文帝与_二鍾繇書曰、歲往月来、忽復九月九日、……至於芳菊、紛然独榮……
〔芸文類聚〕卷四「九月九日」

魏鍾会菊花賦、……於是季秋初九、日数将並、置_二酒華堂_一、高会娛_レ情、百卉彫瘵、芳菊初榮……

〔芸文類聚〕卷八十一「菊」

などであるように、菊は九月九日に満開を迎えるという認識があった。以上のことから、中国では、菊は元来長寿をもたらす呪力のある植物とされ、それは長久の意味にちなんだ九月九日の節物として存在していたことが分かる。

唐代に入って以降、菊と九月九日重陽との関係が更に密接となり、次の詩に至ると、

奉和_三聖制重陽節宰臣及群官上_二寿_一心_レ制 王維

……

無窮_レ菊花節 無窮なり 菊花の節

長奉柏梁篇 長に奉ず 柏梁の篇 (『全唐詩』卷二二七)

というように、重陽は「菊花節」とまで呼ばれるようになったのである。要するに、唐代では、菊が重陽の日を飾る花であり、九月九日こそ菊を觀賞するのにもっともふさわしい日である、という認識があった。

以上のように本当に菊は九月九日前後に満開を迎えるのなら、毎年重陽の夜に強い風雨が起らない限り、九月十日になって、菊が一夜のうちに傷んで敗れたり、残り少なくなったりすることは、極めて考え難い。したがって、「九月十日」の「残菊」の「残」は、小島憲之氏の謂う「敗れて損なう」⁽⁵⁾意味と、菅野禮行氏の言う「咲

き残る」⁽⁶⁾意味との、いずれでもないのではなからうか。

では一体、唐詩に詠まれた「九月十日」の「残菊」とは、どのような意味を持つのであろうか。先に挙げた唐詩の「残菊」の例をいまだ一度思い出してみよう。羊士諤「九月十日郡樓独酌」にある「嘉辰恨已失、殘菊誰為惜」は、「重陽が過ぎた以上、誰が殘菊を惜しむだろうか」と嘆いている。また、顧非熊「万年厲員外宅殘菊」の「纔過重陽後、人心已為殘」は、「重陽が過ぎたばかりなのに、人々はすでにそれを『殘』と思うのだ」と言っている。さらに、次の杜甫の詩を見てみよう。

歎_二庭前甘菊花_一 杜甫

檐前甘菊移時晚 檐前の甘菊 移せし時晚く

青蕊重陽不堪摘 青蕊にして 重陽に摘むに堪えず

明日蕭条醉尽醒 明日蕭条として 酔ひ尽く醒め

殘花爛熳開何益 殘花爛熳として 開くも何の益かあらん

…… (『全唐詩』卷二二六)

ここでは、「重陽の日に摘むのに間に合わなかった菊は、翌日に『殘花』が満開していても意味がない」と詠んでいる。「爛熳」は花が満開している様子をいうもので、ここでは菊の「殘花」を言っている。⁽⁷⁾杜甫のこの作品は、先の二首とともに、当時中国での一般的

な認識を反映しているのであろう。つまり、菊が重陽の日にこそ観賞価値や利用価値があると思われ、それに対して「残菊」は、それは重陽という一番いい時期を逃した、価値のないものだと思われたのである。

中・晩唐に至ると、以上のような認識が更に根強くなり、次の、

十日菊 鄭谷

節去蜂愁蝶不知 節去り 蜂愁ふるも蝶は知らず
曉庭還繞折殘枝 曉庭還り繞りて 殘枝を折る
自緣今日人心別 自ら今日人心の別るるに縁るも
未必秋香一夜衰 未だ必ずしも 秋香一夜に衰へず

〔全唐詩〕卷六七五

十日菊 薛瑩

昨日尊前折 昨日 尊前に折り
万人酣曉香 万人曉香を酣しむ
今朝籬下見 今朝 籬下に見れば
滿地委殘陽 地に満ちて殘陽に委ぬ
得失片時痛 得失 片時痛み
榮枯一歲傷 榮枯 一歲傷む
未將同腐草 未だ將て腐草と同じからざるに

猶更有重霜 なお更に重霜有り 〔全唐詩〕卷八八四

などの詩があるように、「十日菊」という概念まで生じたのである。この二首はともに、一夜明けたら人々に忘れられるという殘菊の哀れな運命について感嘆している。鄭谷の詩は、後世の詩話にしばしば取りあげられているが、その中に、清代の吳景旭氏が編纂した『歷代詩話』に、宋代の何燕泉の詩話を引用した次の一節がある。

人之視_レ菊、直繫_二其時_一焉耳、当_二其時_一則重_レ之、而非_レ為_二其有所_レ加、過_二其時_一則否、而非_レ為_二其有所_レ損也。

〔歷代詩話〕卷五十三「唐集八」

これは、まさに中国に於ける「殘菊」の本質を突き止めていると言えよう。「殘菊」の「殘」は、実際に損なわれているという意味でも、ただ咲き残っているという意味でもなく、菊が重陽という一番良い時期を過ぎたことに対し、心理上において、それを価値のない、欠点のあるものとする、ということであった。

ちなみに、宋代に至ると、蘇軾の次の、

九日次韻王鞏 蘇軾

……

相逢不用忙歸去 相逢はば 忙しく歸去することを用ゐず

明日黄花蝶也愁 明日黄花 蝶もまた愁ふ

〔蘇軾詩集合注〕卷十七

という詩に見られる「明日黄花」という言葉がよく見られるようになる。また、蘇軾の詩は明らかに先の鄭谷の「十日菊」詩を踏まえたものである。

このように、唐詩における「残菊」は、主に重陽を過ぎたばかりの九月十日の菊を指し、それをさらに「十日菊」、「明日黄花」とする表現が後に現れるように、重陽の後の菊は時期を過ぎて価値のないものであるという認識はずっと続いていたのである。中国において、「残菊」はとうとう、賛美の対象にはならなかったのである。唐代の白居易の作には、

効陶潜體 詩十六首。並序（其の八）

……

重陽雖已過 重陽 已に過ぎたりと雖も

籬菊有殘花 籬菊 殘花有り

……

〔白氏文集〕二二〇

晩秋夜

……

花開殘菊傍疎籬 花開きて 殘菊 疎籬に傍ひ

葉下衰桐落寒井 葉下ちて 衰桐 寒井に落つ

……

〔白氏文集〕七四二

などのような、「残菊」をそれほど否定的に捉えていない例も見られるが、それも当時の一般的な認識に強いて反撥しているのではなく、「残菊」はただ晩秋の寂寥たる風景を引き立てる一要素に過ぎなかった。

以上のように、中国では、「残菊」は、「遅くまで咲き残る菊」でも「傷んだ菊」でもなく、主に重陽というもともと人に観賞される時期を過ぎて、観賞価値が無くなった菊として登場し、マイナスのイメージを持ち、あまり主題に取りあげられることもなかったのである。

四 菅原道真の「残菊」のイメージ

では、道真の方はどうであろうか。先に触れたように、道真の「残菊」を詠む詩で、「九日後朝」つまり九月十日の日付が見られるのは、ただ一首のみである。しかも、そこでは、

九日後朝、侍朱雀院、同賦閑居樂秋水、応太上天皇

制。並序。

……嗟呼、節過重陽、殘菊猶含旧氣。……

〔菅家文章〕卷六・四四三

とあるように、菊は重陽の日を過ぎても、重陽の日と同じように見る価値があると言い、唐の「九月十日」の「殘菊」を詠む詩に見られるマイナスのイメージは見られない。また次の、

路邊殘菊

菊過重陽似失時 菊 重陽を過ぎて時を失へるに似たり
相憐好是馬行遲 相憐れむ 好し是れ馬の行くこと遅し
金精未滅薰香在 金精未だ滅せずして 薰香在り
欲把還羞路拾遺 把らんと欲して還た羞づ 路に遺ちたるを拾ふを

〔菅家文章〕卷四・二七二

という詩においても、「菊は重陽を過ぎると時を失ったようだが、まだ色も香りも衰えることがない」と詠み、菊は必ずしも重陽だけに見るものではないという意味が込められている。

この「菊過重陽似失時」や、先に挙げた「黃華之過重陽、世俗謂之殘菊」〔菅家文章〕卷五・三五六)を見れば、道真は、唐における「殘菊」に対する認識を知っていたと考えられる。しかし、「似」や

「世俗」などの言葉から、道真は唐の一般的な認識に距離を置いていたことが分かる。特に、「黃華之過重陽、世俗謂之殘菊」を冒頭とする詩序では、「殘菊」のことを、

夫難遇易失者時也。難榮易衰者物也。三秋已暮、一草独芳。

……
〔菅家文章〕卷五・三五六

と言ひ、重陽が過ぎてもまだずいぶん遅い時期まで咲き誇る菊の華やかな姿を表している。中国の詩文では、「独」は「殘菊」を表すのに用いられず、むしろ、先に挙げた「魏文帝与鍾繇書」の「至於芳菊、紛然独榮」や、次の、

雲安九日、鄭十八攜酒陪諸公宴 杜甫
寒花開已尽 寒花 開くこと已に尽き
菊蕊独盈枝 菊蕊 独り枝に盈つ

……
〔全唐詩〕卷二二九

などのように、百花に遅れて九月九日重陽の日に満開になる菊を賛美するのに用いられたのである。これに對して、道真は、「独」という表現を「殘菊」を賛美するのにも用いているのであり、重陽の菊と「殘菊」とに価値の差があるという認識を持たなかったようで

ある。ちなみに、道真の「残菊」を詠む作品には、「独」の他には、また、

惜_ニ残菊_一、各分_ニ一字_一、応_レ制。並序

寒鞭打後菊叢孤 寒鞭打ちて後 菊叢孤なり

相惜相憐意万殊 相惜み相憐れむ 意万殊なり

……
〔菅家文章〕巻五・三五六

暮秋、賦_ニ秋尽_一、應_レ令。並序

……孤叢_ニ両三茎_一、孰不_レ謂_ニ之残菊_一。……

〔菅家文章〕巻五・三八一

などとあるように、「菊叢孤」や「孤叢」という表現が見られる。しかし「孤」と「独」は元々意味が異なるものである。「独」は、「独立」、「独裁」、「独擅」などのように、「他者を凌ぐ」、「独り占め」というニュアンスが強く、積極的に拡張的な傾向を示す表現に多く用いられる。一方、「孤」は、「孤立」、「孤児」、「孤雲」などのように、「周囲の他者と不調和」または「ひとりぼっち」といったニュアンスが強く、隔離されている消極的な物事を表現するのに多く使われる。したがって、「孤叢」は、中国の詩においては、

重陽席上賦_ニ白菊_一

満園花菊鬱金黃 満園の花菊 鬱金の黄

中有孤叢色似霜 中に孤叢有りて 色霜に似たり

還似今朝歌酒席 還た似たり 今朝の歌酒の席

白頭翁入少年場 白頭の翁の少年の場に入りしに

〔白氏文集〕二七七四

という白居易の詩の一例がなく、しかもそれは、「今日の宴の席上で、満座の少年の中に、たった一人の白髪の老人（作者自身）が交じっている」ことに比喻されており、周りと調和しない寂しい存在であることを強く示している。これに対して、道真の詩における白菊の「孤叢」は、白居易の場合と異なって、いずれも「残菊」を賞美するのに用いられている。そして、道真は「孤」という語に含まれた隔絶感と寂寥感と、両面ともに的確に把握し、「ぼつんとひとむらだけ」を意味すると同時に、他の植物と同調しないという白菊の品格の孤高さをも意味している¹⁰。

また、道真の「残菊」を詠む表現には、次の二首の詩に、

残菊詩

十月玄英至 十月 玄英至る

三分歳候休 三分 歳候休す

暮陰芳草歇

暮陰 芳草歇き

残色菊花周

残色 菊花周し

為是開時晚

是れ開く時の晚きが為なり

当因発処稠

当に発する処の稠なるに因るべし

染紅衰葉病

紅に染み 衰葉病ひ

辞紫老茎惆

紫を辞し 老茎惆たり

露洗香難尽

露洗へども 香は尽き難し

霜濃艶尚幽

霜濃けれども 艶は尚幽かなり

低迷馮砌脚

低迷して 砌脚に馮り

倒垂映欄頭

倒垂して 欄頭に映る

霧掩紗灯点

霧掩ひて 紗灯点し

風披匣麝浮

風披ひて 匣麝浮ぶ

蝶栖猶得夜

蝶栖みて 猶夜を得

蜂採不知秋

蜂採りて 秋を知らず

已謝陶家酒

已に陶家の酒を謝し

将随酈水流

将に酈水の流れに随ふべし

愛看寒暑急

愛しみて看る 寒暑の急ぐるに

秉燭豈春遊

燭を秉るは 豈に春遊のみならんや

〔菅家文章〕卷一・三

陶家秋苑冷 陶家 秋苑 冷にして

残菊小籬間 残菊 小籬の間

為是開時晚 是れ開く時の晚きが為なり

当因得地閑 応に地の閑なるを得たるに因るべし

……〔菅家文章〕卷二・一五三

と、「開時晚」という表現が見られる。これは、先に挙げた杜甫の「歎庭前甘菊花」の第一句「檐前甘菊移時晚」を彷彿させる。しかし、杜甫の詩では、菊が重陽に咲くのに間に合わなかったことを「移時晚」とし、残念に思う気持ちが込められているのに対して、道真の詩では、晩秋になっても菊がまだきれいに咲き残っていることを「開時晚」とし、ただ「残菊」を賞美して憐れむ心情だけが詠み込まれている。特に一首目の「残菊詩」では、菊の傷んだ姿を詠みながらも、「露洗香難尽、霜濃艶尚幽」と、まだ十分觀賞できることも強調している。そして、「蝶栖猶得夜、蜂採不知秋」は、先にあげた唐の鄭谷「十日菊」にある「節去蜂愁蝶不知」を想起させる。ここにおいても、道真の敢えて唐の「残菊」に対する認識に随わない姿勢が窺える。

さらに、次の詩では、

蘆簾砌下水辺欄 水辺の欄

秋只一朝菊早寒 秋は只一朝 菊早に寒し

幸被君臣交畝種 幸ひに君臣に畝を交へて種あられ

任他意氣満園残 他の意氣園に満ちて残るに任す

……

〔菅家文章〕巻六・四六一

第四句で「菊のおもむきはまだ花園いっぱい満ち残っている」と詠うように、「残」は「残る」意味であり、「残菊」は、いつまでも咲き残る菊のことをいうものと思われる。さらに、次の詩では、

对_ニ残菊_一詠_レ所_レ懷、寄_ニ物忠両才子_一

思家一事乱無端 家を思ふ一事 乱れて端無し

半畝華園寸步難 半畝の華園 寸歩も難し

偏愛夢中禾失尽 偏へに愛しむ 夢のうちに禾の失ひ尽きたるを

不知籬下菊開残 知らず 籬下に菊の開き残れるを

〔菅家文章〕巻四・三〇五

とあるように、「京の家のことで思い乱れて、花園を歩く足も重い。早く任期を終えて京に戻ることを夢見て、官舎の庭にまだ咲き誇っている『残菊』のことさえ見逃してしまいそうだった」と詠ん

でいる。ここの「開残」は、中国の詩文には見あたらない表現であり、「咲き残る」という意味を表したものと思われる。また、次の、

对_ニ残菊_一待_ニ寒月_一。于_レ時間十月十七日、陪_ニ第九皇子詩亭_一

月初破却菊纔残 月初めて破却し 菊纔かに残れり

漁夫樵夫抑意難 漁夫樵夫すら意を抑ふること難し

況復詩人非俗物 況んやまた詩人の俗物に非ずして

夜深年暮泣相看 夜深く 年暮れて 泣きて相看るをや

〔菅家文章〕巻六・四五二

という詩にみられる「纔残」という表現も、中国の詩に見あたらず、菊が「わずかに残る」意味として詠まれていると思われる。一首は、「晩秋の季節まで咲き残った菊は、誰もが惜しまずには居られない」と詠み、「残菊」の賞美が当時一般の風習であったことを裏付けている。

以上のように、道真の詩における「残菊」は、主に「重陽が過ぎたとしても、菊はまだ遅くまで咲き残る」というニュアンスで詠まれ、中国では重陽の日を過ぎたばかりとしても価値のないものとされる「残菊」を、積極的に賛美する態度を詠出している。要するに、日中ともに「残菊」を重陽が過ぎた後の菊と見なしていたものの、その時期もイメージもかなり異なるのであった。この点こそ、日中

における「残菊」の根本的な相違なのではなからうか。

もちろん、唐詩にも道真の詩にも、「残菊」の衰残の姿を詠んだものがないわけではない。しかし、以上分析してきたことを考えれば、日中においてともに、それは「残菊」の主眼ではなかったと言えよう。道真の詩に詠まれている「残菊」は、やはり主に「遅い時期までも咲き誇る」というイメージを持ち、大いに賛美の対象とされていた。それは、同時代の漢詩人たちにも影響し、さらに和歌において「うつろふ菊」として受け継がれ、日本独特の「残菊」賞美の世界が確立されていくのであった。¹³⁾

五 菅原道真をはじめとする日本の

「残菊」観確立の歴史的・文化的背景

では、なぜ中国では重陽が過ぎると好まれない「残菊」が、日本では道真以降、それほど愛されるようになったのか。それは、寒冷な内陸に位置する長安と、温暖な海洋性気候に恵まれるとともに盆地であるという京都との、地理上・気候上の相違によって、菊の開花時期に差異が生じた、という理由が一番考えやすいのかもしれないが、しかし、そう簡単に片づけることはできないと思われる。宋代の胡仔が著した『苕溪漁隱叢話』にある次の、

江浙間、毎歳重陽、往々菊亦未_レ開、不_ニ独嶺南為_ニ然。

(後集・卷六)

という一節によれば、実際中国の中でも、「江浙」「嶺南」のような温暖な南方においては、重陽になっても開花しないことが多い。それにもかかわらず、観念上で菊花賞美と重陽とを結び付ける慣習が確固なものであった。したがって、「残菊」に対する好みにおける日中の程度の差は、単なる自然環境の相違によったというよりも、やはり、中国と日本とは、元々菊と九月九日重陽との関係に対する認識に相違があったためではないかと考えられる。

日本では、重陽は、中国から伝来した節句であり、中国のように根強い風習ではなかったようである。『類聚国史』の「歳時」によれば、天武天皇十四年(六八五)に初めて、「九月九日」に宴が開かれるという記録があつて以降、九月九日重陽の宴は、嵯峨・淳和・仁明朝と光孝・宇多・醍醐の二つのピーク期を挟みながらも、様々な事情で停止されることが多く、断続的に行われていたと分かる。¹⁴⁾ そしてついに、

停_ニ九日宴_ニ十月行詔。世号_ニ残菊宴_一 後江相公(朝綱)

〔本朝文粹〕卷二)

という題で書かれた「天曆四年(九五〇)九月二十六日」付の詔書によって、「重陽宴」が「残菊宴」に代えられたのである。

つまり、中国では、九月九日その日自体の持つ意味が大切であり、その日には皇帝から一般の庶民まで、誰もが祝うものであるのに対して、日本では、中国のように重陽に対する信仰や認識がなく、単なる宮中で宴を開くのにふさわしい節句として存在していたのであり、事情があれば中止されていたものようであった。

また、菊と重陽との関係も、日本では必然的ではなかったようである。『懷風藻』所収の安倍広庭の「秋日於長王宅宴新羅客」の詩に、

……

傾斯浮菊酒

斯の菊を浮かべる酒を傾けて

願慰転蓬憂

願はくは転蓬の憂を慰めん

（『懷風藻』七一）

と、「浮菊酒」という言葉があるが、これについては、北山円正氏は、この詩は養老七年（七二三）の重陽より一ヶ月前ぐらいに作られたと断定できる点、そして『懷風藻』に「菊酒」や「菊氣」などの言葉を含む詩はいずれも明確な日付が書かれていないという点などから、これらの詩は重陽ではない日に詠まれた可能性が大きいとし、「中国詩における重陽と菊酒の不可分の関係を、『懷風藻』の詩人は把えていない」と述べている。この論考からは、上代日本にお

ける「菊」への認識の一斑が窺える。また、次の紀元七五〇年の記録によると、

桓武天皇延暦十六年十月癸亥、曲宴、酒酣、皇帝歌曰、己乃己呂乃、志具礼乃阿米爾、菊乃波奈、知利曾之奴倍岐、阿多羅蘇乃香乎、……
（『類聚国史』卷七十五「歳時六」）

とあるように、古くから、重陽よりかなり経つ遅い時期に宴を開き、その場で菊のことを和歌に詠む例があったのである。さらに、平安朝では、菊と大きな関係を持ついくつかの詩歌の行事があったが、それをまとめれば、

・寛平御時菊合（寛平三年（八九二）「ふゆ」が読み込まれている）

・延喜十三年内裏菊合（九一三年十月十三日）

・醍醐御時菊合（延喜二十二年（八九二）「あきすぎて」や「ふゆ」などの言葉が見られる）

・天曆七年内裏菊合（九五三年十月二十八日）

・上東門院菊合（長元五年（一一〇三）十月十八日）

・元永元年内大臣家歌合・「残菊」（一一一八年十月二日）

というように、それらはいずれも九日より遙かに遅い時期に行われていたことがわかる。

要するに、日本では、菊の花は九月九日重陽の日だけに賞美するものであるとは必ずしも思われていなかったのであり、重陽を過ぎても、かなり遅い時期まで菊を賞美したのである。先に述べてきた道真の「残菊」賞美観は、以上のような中国と異なる賞菊伝統の流れの中に位置するものとして、ごく自然に培われてきたのではないか。

なお、道真をはじめとする日本の「残菊」は、「惜秋翫残菊」という詩題に象徴されているように、日本独自の「惜秋」の觀念と連動して発生したものである。このことについては、すでに渡辺秀夫氏によって指摘されているが、ここではいまだ一度「惜秋翫残菊」の詩に表れる詩人たちの時間への把握に注目したい。先にあげた「惜残菊各分一字応制並序」(『菅家文章』巻五・三五六)では、道真は、「夫難遇易失者時也。難榮易衰者物也」と言っている。また、次の作品を見てみよう。

暮秋、賦_レ秋尽翫_二菊、_レ応_レ令_二並序_一 菅原道真

惜秋秋不駐 秋を惜しむも 秋駐まらず

思菊菊纔残 菊を思ふも 菊わずかに残るのみ

物与时相去 物と時 相去れば

誰厭徹夜看 誰か夜を徹して看るを厭はん

〔菅家文章〕巻五・三八一

惜_レ秋翫_二残菊_一各分一字_二応制_一(序) 紀長谷雄

惜_レ秋翫_二残菊_一、蓋_二賞_二時_一変_二也_一。当時侍者皆相語曰、凡情之難_レ堪者、莫_レ過_二於秋天_一、感之至切者、莫_レ深_二於歲暮_一、況復孤叢之將_レ尽、寒花之纔残、…… (『本朝文粹』巻十二)

これらの作品は、「残菊」とともに移り去っていく時間を惜しむ、というところにおいて共通している。中では特に、紀長谷雄が言う「秋を惜しみて残菊を翫ぶことは、蓋し時の変を賞するなり」は、先に引用した中国宋代の何燕泉の詩話の「人之視菊、直繫其時焉耳」とは、まさに好一对である。大陸では時が過ぎると価値のないものとされたものは、日本の詩人たちの筆下では、それが時間とともに移ろうからこそ大いに賞美されていたのである。

このように移ろう時間を敏感に把握し、植物や人事など、世の中のあらゆる事柄を時間の流れに置いて考えるのは、古来日本独特の、特に平安時代に入ってから観念である。⁽¹⁷⁾「残菊」の先行論考では、道真らの漢詩が和歌に影響を与えたとするものが多いが、道真らが中国と異なる「残菊」観を作り上げられたのは、むしろ、時間とともに移ろっていくものに価値を見出すという日本的美意識の共通する基盤を持っていたからなのではないか。

このように、道真を初めとする日本の漢詩人たちは、中国の詩の言葉と形式を自分自身のものとしながらも、日本独特の美意識に深

く根ざした、中国の詩に見られない新たな展開を示すものとなった。「残菊」はその一例であるが、今後とも、道真の詩文を中心に、日本漢詩文の美意識と表現においての中国詩文と異なる独自のものを探究していきたい。

注

- (1) 「残菊」を取りあげた主な先行論文(注(2)～(4)に挙げた以外)
- ・本間洋一「菊の賦詩歌の成立―菊花詠の小文学史―」(『王朝漢文学表現論考』和泉書院、二〇〇二年二月、三一―五六頁。一九八四年初出)
 - ・菅野洋一「菊のうつろい―日本の美意識の伝統―」(『文芸研究』一九八八年九月、六三―七二頁)
 - ・徳植俊之「菊歌攷―冬の菊歌をめぐる―」(『和歌文学研究』六一、一九八九年十月、一一―二頁)
 - ・菅野洋一「菊花の漢詩と和歌・俳句」(『東北工業大学紀要へ人文社会』一一、一九九一年三月、三九―五二頁)
 - ・渡辺秀夫「菊花のイメージ―日本と中国」(『しにか』一九九七年九月号、三六―四三頁)
 - (2) 小島憲之「漢語享受の一面―嵯峨御製を中心として―」(『龍谷大学論集』四一〇、一九七七年五月、一二―二頁)
 - (3) 本間洋一『本朝無題詩全注釈』一(新典社、一九九二年三月)

一二八頁「賦残菊(藤原敦基)」詩の注釈による。

- (4) 菅野禮行「道真の残菊詩の独自性」(『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』大修館書店、一九八八年十月、四六一―五〇〇頁)

(5) 同注(2)

(6) 同注(4)

- (7) 吉川幸次郎『杜甫詩注 第一冊』(筑摩書房、一九七七年八月)一九五頁の注釈による。

(8) 敵寿澄ほか『鄭谷詩集箋注』(上海古籍出版社、一九九一年五月)二〇六頁の注釈による。

(9) 中国古典詩において、「咲き残っている菊」という意味を表すには、「余菊」という言葉がある。

(10) 「孤」と「独」の相違や道真の詩における「孤叢」という表現については、拙稿「菅原道真詩に見られる『孤叢』という表現をめぐる」(『菅原道真論集』勉誠出版、二〇〇三年二月、一〇九―一三二頁)を参照されたい。

(11) 「不失」は「秩」、「官職」を意味する。したがって、「不失秩」は「秩尽」、官の任期が満了することを意味する(『漢書』「蔡茂伝」の故事による)。

(12) 道真の作以外で、同時代の日本漢詩文に「残菊」が詠まれた主な作品は次のようである。

・『雑言奉和』「惜秋翫残菊応制」を題にする詩十四首(この作品群の出版については、『日本詩紀』の「引用書目」の所に『残菊詩卷(寛平中内宴侍臣応制詩卷)』という記録がある)

・紀長谷雄の詩序六首（『本朝文粹』巻一一・三三〇、三三一、三三四、三三五、『和漢朗詠集』二六八、『新撰朗詠集』二六〇）

・延喜七年大井川御幸詩歌「菊花残」一首（後藤昭雄「延喜七年大井河御幸詩」（『平安朝漢文文献の研究』七二八九頁、吉川弘文館、一九九三年六月。一九八四年初出）による）

（13） 中村佳文「『古今和歌集』菊の歌群放—宇多朝文壇の漢詩と和歌—」（『平安朝文学研究』復刊八、一九九九年十一月、一一二頁）

（14） 『類聚国史』巻七四「歳時五・九月九日」（天武・宇多）による。なお、宇多朝から一条朝までの重陽宴については、滝川幸司「一条朝文壇の形成—重陽宴の変容を通して」（『古代中世文学研究論集』和泉書院、一九九六年十月、一三四頁）に附された「重陽宴年表」（宇多—一条）を参照されたい。

（15） 北山円正「重陽節会の変遷（上）—節会の詔勅・奏類をめぐって—」（『平安文学研究』七八、一九八七年十一月、一二二—一三二頁）

（16） 渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年一月）九二頁。なお、「惜秋」については、太田郁子「『和漢朗詠集』の『三月尽』・『九月尽』（『国文学 言語と文芸』九一、一九八一年三月、二五—四九頁）を参照されたい。

（17） 平安人が時間に対して敏感であるということについては、主に平野仁啓「日本人の時間意識の展開 古代から中世へ」（明治大学文学部紀要『文芸研究』二一、一九六九年三月、一—五五頁）、高木市之助「日本文学の環境」（『高木市之助全集』第七卷、講談社、一九七六年十一月）、李元熙「『古今集』における時間意識」（東北大学

『日本文芸論叢』六、一九八八年三月、一—八頁）などの論考による。

〔付記〕

本稿は平成十七年三月に行われた「文化としての植物—日本の内と外—」の共同研究会での発表に基づいてまとめたものです。また、査読の際に貴重なご意見をくださった諸先生には、心からお礼を申しあげます。